

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

館林市内遺跡発掘調査報告書
TATEBAYASHI-SHINAI

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成7年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教　育　長　高瀬利一
教　育　次　長　関口久男
主　管　課　文化振興課
文化振興課長　田沼俊彦
文化財係長　石井正和
学　芸　員　岡屋英治　岡屋紀子　黒澤文隆（担当）
　　　　　　野口弥生　砂場幸恵
調査補助員　寺内景子
作業員　石井悦雄　石川栄吉　石川有紀　尾川邦代
　　　　　小林浩子　坂田岩吉　砂場一寿　寺内義正
　　　　　野口信　早野茂　林正行　半田和史
　　　　　麻生尚子　川島範子　荻野貴子　松本末吉

3. 調査に伴う経費は、国及び県より補助を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
5. 本書のとりまとめは、黒澤が中心となり行った。
6. 調査並びに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関のご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。

目　　次

例　言

第Ⅰ章 館林市の環境	1
第Ⅱ章 各遺跡の調査	
第1節 下堀工道溝遺跡（B地点）	4
第2節 北近藤第一地点遺跡（C地点）	6
第3節 二本松遺跡	9
第4節 館林城跡（加法師郭土塁）	12
第5節 八方遺跡（I地点・J地点）	19
第6節 志柄1遺跡（B地点・C地点）	23
第7節 当郷遺跡	25
抄　　録	28

図 版 目 次

第1図 館林市の位置と現況図	1
第2図 館林市の地形概念図	2
第3図 住居址が検出された遺跡	3
第4図 平成7年度実施の発掘調査地位置図	4
第5図 下堀工道溝遺跡周辺図	5
第6図 下堀工道溝遺跡B地点トレンチ配置図	5
第7図 北近藤第一地点遺跡周辺図	6
第8図 北近藤第一地点遺跡C地点出土遺物	8
第9図 北近藤第一地点遺跡C地点調査区全体図	8
第10図 二本松遺跡周辺図	9
第11図 二本松遺跡調査区域図	10
第12図 二本松遺跡Ⅲ区トレンチ配置図	11
第13図 館林城の郭の配置と調査地位置図	13
第14図 館林城跡加法師郭土壘トレンチ配置図	15
第15図 館林城跡加法師郭土壘1トレンチ断面図	18
第16図 館林城跡加法師郭土壘3トレンチ断面図	18
第17図 館林城跡加法師郭土壘2トレンチ断面図	19
第18図 八方遺跡周辺図	20
第19図 八方遺跡既往調査地点と調査地位置図	20
第20図 八方遺跡I地点トレンチ配置図	21
第21図 八方遺跡J地点トレンチ配置図	22
第22図 志柄1遺跡周辺図	23
第23図 志柄1遺跡B地点トレンチ配置図	24
第24図 志柄1遺跡C地点トレンチ配置図	25
第25図 当郷遺跡周辺図	25
第26図 当郷遺跡調査区全体図	26

写 真 目 次

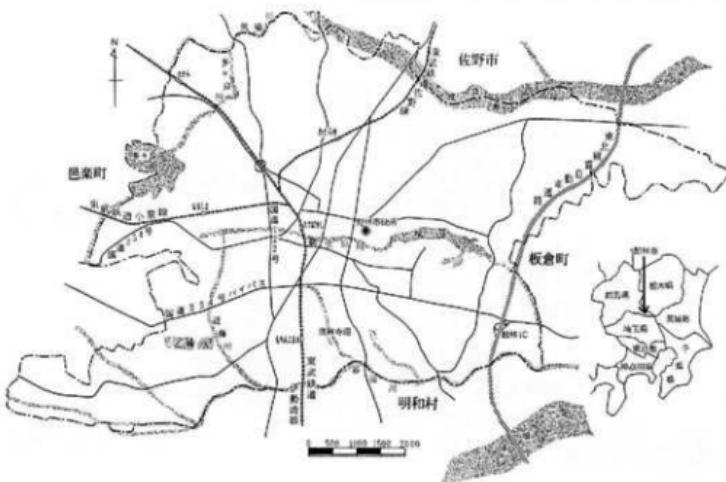
写真1	北近藤第一地点遺跡概往調査で検出された住居址とC地点	7
写真2	北近藤第一地点遺跡C地点土坑	8
写真3	二本松遺跡18トレンチ	11
写真4	近世の館林城絵図に見える「中間町」	13
写真5	西尾市立資料館所蔵館林城絵図	13
写真6	館林城跡加法師郭土壘の景観（立木伐採前）	14
写真7	館林城跡加法師郭土壘1トレンチ	16
写真8	館林城跡加法師郭土壘2トレンチ	16
写真9	館林城跡加法師郭土壘3トレンチ	16
写真10	館林城跡加法師郭土壘3トレンチ	17
写真11	館林城跡加法師郭土壘3トレンチ	17
写真12	館林城跡加法師郭土壘の景観（立木伐採後）	17
写真13	八方遺跡J地点1号土坑出土遺物	21
写真14	八方遺跡J地点2号土坑出土遺物	21
写真15	志柄1遺跡B地点3トレンチ拡張部	24
写真16	当郷遺跡井戸	27
写真17	当郷遺跡溝	27
写真18	当郷遺跡出土遺物	27
写真19	当郷遺跡出土遺物	27

第Ⅰ章 館林市の環境

1. 地理的環境

館林市は群馬県の南東部に位置し、市役所のある場所（城町）で、東経139度32分44秒、北緯36度14分30秒である。

市域は、東西約15km、南北約8kmと東西に長く、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、渡良瀬川遊水地を経て茨城県に、南は邑楽郡明和村を越え利根川を境に埼玉県にそれぞれ接している。県都前橋までは約50km、首都東京（浅草）へは約65kmの距離にある。



第1図 館林市の位置と現況図

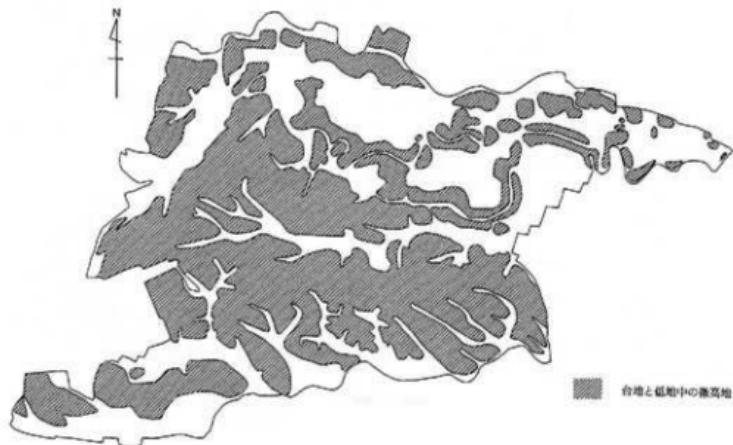
地形的には、関東平野の北西部にある。現在の標高は、15m台（大島町東部）から32m台（高根町）の中に收まり、概ね平坦であるが、関東ロームに覆われた低い台地と周辺の低地に大別される。

低い台地は、太田市高林から市中央部を東西に延び板倉町にまで達する洪積台地で、「邑楽・館林台地」と呼ばれている。この台地は、大泉町古海から館林市日向町に至る幅約500m程の旧河道により分割されており、市域の台地は、日向町を除き旧河道の右岸（南岸）にあたる。

旧河道右岸（南岸）の台地上には、幅約200m程の埋没河畔砂丘が連なる。台地からの比高は、プラス5m程で、多々良沼の西方の景観に代表されるように、アカマツを中心とする雑木林となっている。

台地の北には、利根・渡良瀬川に連なる大小河川の氾濫原である低地が広がる。現況は農村地帯になっている。一見平坦に見えるが、古い空中写真などの資料により微高地や旧河道の窪地が観察できる。微高地は、中・近世に成立した集落の居住域であり、自然堤防と考えられていたが、関東平野の各地の沖積地内で遺跡が発見されていることから、ローム層が埋没している可能性がある。

台地の縁辺部は、低地から延びる谷（雨水の集水域）が樹枝状に開析し、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成され、本市の特色ある景観となっている。



第2図 館林市の地形概念図

2. 市内の遺跡

「館林市の遺跡」に登載されている本市の遺跡数は、推定地を含め144である。

散布地及び集落址は、112あり、多くは低い台地上に立地している。時代別には、旧石器時代3、縄文時代13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代0、古墳時代から平安時代96（うち縄文を含むもの23）である。縄文時代の後期から古墳時代初頭の遺跡が少ないことが特徴とし

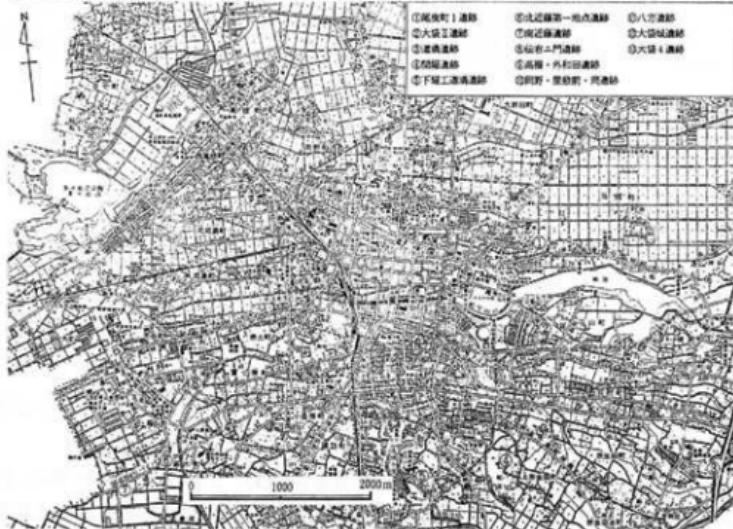
て挙げられる。

低地において実施された、シンウォールサンブラーによる試錐調査によると、縄文時代（約3000年～2000年前）には、低地の一部が乾燥し、その後埋没が進んだことが推定されており、上記の特徴とのかかわりが想起される。

発掘調査により住居址が検出された遺跡としては、高根・外和田遺跡（古墳時代）、伝右エ門遺跡（古墳時代）、道溝遺跡（弥生時代から古墳時代への移行期）、大袋II遺跡（縄文時代）、間堀遺跡（縄文時代）、岡野・屋敷前・岡遺跡（縄文時代）、下堀工道溝遺跡（平安時代）、北近藤第一地点遺跡（古墳・平安時代）、南近藤遺跡（古墳・奈良時代）、尾曳町1遺跡（古墳時代）、八方遺跡（古墳時代）、大袋城遺跡（古墳時代）、大袋4遺跡（古墳時代）などがある。全体としては、土地の人工改変の影響が大きく、保存状況については良好とは言えない。

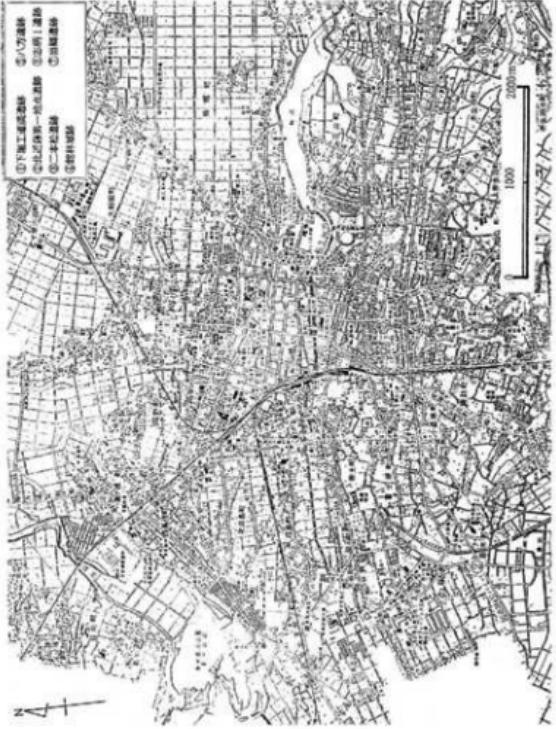
その他の遺跡としては、古墳17（延25基）、中世生産址1、中世城館址12及び近世城館址2が登載されている。

古墳については、昭和10年刊行の『上毛古墳総覧』に67基の古墳が記されている。開発により墳丘は失われているが、平成6年度の発掘調査により、周溝の一部が確認された下遺跡の例などから、今後も周溝等が発見される可能性がある。



第3図 住居址が検出された遺跡

第Ⅱ章 各 遺 跡 の 調 査



第4図 平成7年度実施の発掘調査地位置図

第1節 下堀工道遺跡（日地点）

1. 立地と環境

下堀工道遺跡は、東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の東方約700mに位置する。所在地は堀工町字道溝であり、赤生田町字道溝にも遺跡があるため、小地域名である「下堀工」を付して命名された。

地形的には、茂林寺沼を形成する開析谷の北岸の洪積台地上に立地している。現在の遺跡地の標高は、20mを越え、周辺の低地（茂林寺沼運原）との差は2m以上ある。

散布する遺物は古墳時代から平安時代のものであり、昭和58年度の発掘調査により、平安時代の遺物を伴う住居址が検出している。

周辺の遺跡（茂林寺沼を形成する開析谷に臨む台地上の遺跡）としては、本遺跡の他に、昭戸遺跡（埴輪文）、腰巻遺跡（埴輪文）、美園町（埴輪文）、雀原遺跡（埴輪文）、法正谷遺跡（平安）、前通遺跡（平安）、中山東遺跡（平安）が分布している。

2. 調査の概要

下堀工道溝遺跡B地点の発掘調査は、地権者(株)第一住建の堀工町字道溝1059-1、-2の土地における宅地造成に先立つ事前確認調査として実施された。同遺跡では、昭和58年度に茂林寺川改修に伴い発掘調査が行われているためB地点とした。

開発内容は、道路を新設しての宅地分譲であり、同遺跡の調査前の現況は山林となっていた。既往調査では、木根の影響により保存状態が悪いことが確認されていた。住居址が検出しているものの、平面からではなく、断面からの確認である。

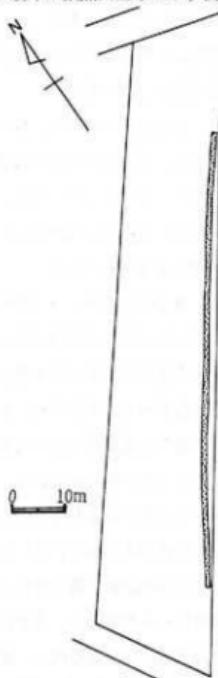
調査地は、南に低地を控えた土地であるため、南北方向のトレンチを設定した。

この結果、既往調査の住居址に対応するような遺構は無く、木根や後世の人工改変により破壊されていることが確認された。

なお、トレンチ中より縄文土器や平安時代の土師器の破片が数点出土したが、調査面積の割りには少量である。



第5図 下堀工道溝遺跡周辺図



第6図 下堀工道溝遺跡

B地点トレンチ配置図

第2節 北近藤第一地点遺跡（C地点）

1. 立地と環境

北近藤第一地点遺跡は、東武鉄道小泉線成島駅の南西約2000mに位置する。所在地は、苗木町字北近藤及び南近藤地内であり、字北近藤地内の離れた場所にも遺跡があるため、「第一地点」と付して命名された。

地形的には、近藤沼を形成する開析谷の北岸の台地東部に立地している。現在の遺跡地の標高は、21mを越え、低地（近藤沼周辺の農地）との標高差は3m以上ある。

散布する遺物は、縄文時代前期、古墳時代後期及び平安時代のものである。

既往調査は、3回行われており、延30軒の住居址が検出され、そのほとんどが古墳時代の後期の遺物を伴っている。このうち、26軒が昭和62・63年度に実施された国道354号道路改良工事に伴う事前調査である。

調査区域は、遺跡地を東西に貫く幅約25mの範囲であり、22軒の住居址が遺跡地東部に分布していた。現近藤川（鶴生田川放水路）に向けて傾斜する場所からも検出しておらず、近藤沼から北へ延びる開析谷に沿った形の集落の居住域であることを窺わせている。また焼失住居が多いことも特徴として挙げられる。

周辺の遺跡（近藤沼の周辺の台地）には、本遺跡の他に、近藤障子遺跡（縄文時代、古墳時代、破壊）、伝右エ門遺跡（縄文時代、古墳時代）、北小袋遺跡（縄文時代）、小袋遺跡（縄文時代、古墳時代～平安時代）、苗木西遺跡（平安時代）、苗木遺跡（古墳時代、平安時代）、南近藤遺跡（古墳時代、平安時代）、北近藤第二地点遺跡（土師）が分布する。このうち、発掘調査により住居址が検出し、集落址であることが明らかになった遺跡は、伝右エ門遺跡（古墳時代）と南近藤遺跡（古墳時代、奈良時代）である。



第7図 北近藤第一地点遺跡周辺図

2. 調査の概要

北近藤第一地点遺跡C地点の発掘調査は、地権者鍾田善次氏の苗木町字北近藤2521-1、2523-4の土地における店舗建設事業に伴う事前確認調査として実施された。同遺跡では、過去3回の発掘調査が行われており、大規模開発である国道354号道路改良工事に伴う調査を除いた2回の調査に地點名を付けている。このため、今回の調査地をC地点とした。

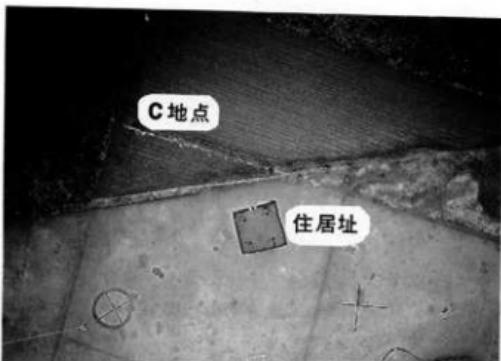


写真1 北近藤第一地点遺跡既往調査で
検出された住居址とC地点

館林市教育委員会では、地権者の代理人より遺跡の取り扱いについて照会を受けた段階で協議を開始した。同遺跡は、既往調査により多くの住居址が検出している。開発予定地は、既往調査記録を照合した結果、住居址が検出した地点の付近にあり（写真1参照）、開発予定地の南部は同じ立地であるため、事前確認調査を実施することとした。

調査地周辺の現況は、盛土により平坦化されていたが、既往調査の結果から北に近藤沼から延びる開析谷の小さな支谷があることが確認されていた。このため調査は、地形を踏まえ南北方向のトレンチを設定し、上記の住居址と同じ立地の範囲の把握を試みた。

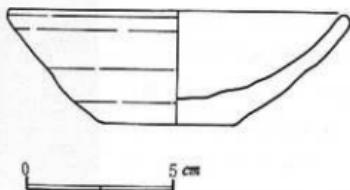
この結果、調査地北部は低地への移行面であり、旧地形の表面が大幅に削られていることが判明した。調査は南部を中心に遺構の有無の確認作業を進め、ローム面を削る掘り込みとして井戸1基、ピット6基、土坑3基を確認した。

ピットについては、規則性がなく性格等は特定できない。土坑の一つからは中世の銭貨と灯明皿が出土している。その他トレンチ中より繩文土器や土師器の破片が出土している。

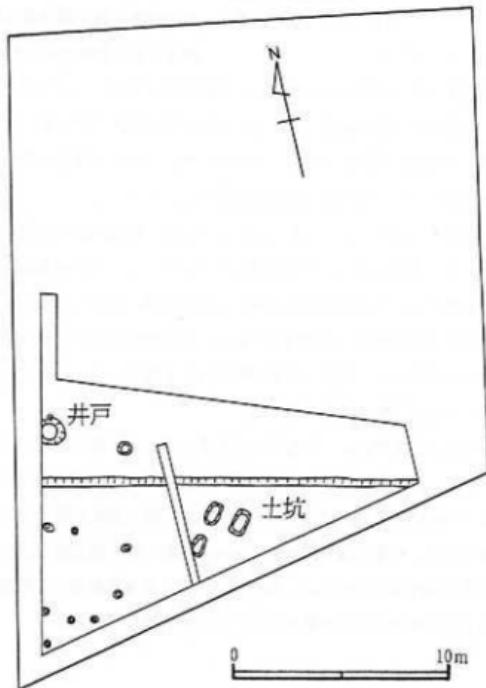
調査地周辺は、国道354号道路改良工事に伴う調査の際、調査面積に比べ住居址の分布が少ない。市道1級11号線より東は調査面積約2000m²で22軒、西が調査面積約4500m²で6軒である。このことから集落（居住域）の中心は、現近藤川に面する遺跡東部で、北側に低地を控えた今回の調査地が住まいの場所としては適さなかったことが推定できる。



写真2 北近藤第一地点遺跡C地点土坑



第8図 北近藤第一地点遺跡C地点出土遺物



第9図 北近藤第一地点遺跡C地点調査区全体図

第3節 二本松遺跡

1. 立地と環境

二本松遺跡は、東武鉄道伊勢崎線館林駅の西約1000mに位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査において、現鶴生田川南の農地に遺物が点在して散布することが確認され、河川に沿って東西約800mの範囲が遺跡の可能性のある土地として推定された。名称は、小字名を付したものである。

地形的には、城沼から西方へ延びる開析谷の南岸の洪積台地上に立地している。上記のとおり、この開析谷は、現在鶴生田川として整備され、一帯の農地の形も方形となり、往時の景観は失われている。地形復元は難しいが、昭和22年11月3日に極東米軍が撮影した空中写真を観察すると、現在の国道354号から北側へ傾斜していた状況が読み取れる。標高は、それぞれ国道…23.4m、遺跡地…21~22m台、鶴田川に近い農地…20m台である。

散布する遺物は、縄文時代と平安時代のものである。既往の発掘調査例はない。周辺住民の方からの聞き取り調査では、昭和30年代に字二本松一帯で、地元による小規模な土地改良が行われたという話があり、遺跡としての保存状況は良くないことが予想された。

周辺の遺跡（城沼から西に延びる開析谷の周辺の遺跡）は、本遺跡の他に富士見町遺跡（平安）、新宿二丁目遺跡（土師器が散布）、富士獄神社古墳、牛島遺跡（平安）、諏訪北遺跡（平安）、妙円寺1遺跡（平安）、同2遺跡（平安）、榮町遺跡（平安）、二ツ家遺跡（平安）、天神遺跡（平安）が分布する。開析谷は、鶴生田川をはじめ全て排水路として整備され、周辺の宅



第10図 二本松遺跡周辺図

地化が進んでいる。富士見町遺跡、新宿二丁目遺跡は発掘調査により破壊された遺跡であることが判明している。

2. 調査の概要

二本松遺跡の発掘調査は、群馬県企業局の大谷町地内における住宅団地造成事業に伴う事前確認調査として実施された。館林市教育委員会では、開発側より予定地内の文化財の取り扱いについて照会を受けた時点で協議を開始した。

遺跡地を含む鶴生田川一帯は、土地改良が行われており、地形は大きく変化している。しかしながら、既往の発掘調査の例がないことから、遺跡の保存状況、遺跡の範囲、遺構の有無の確認を目的とした調査を実施することとした。

調査地は、二本の市道により分断されているため、東よりI区、II区、III区と分割し、トレーニング調査により地下の状況の把握を試みた。



第11図 二本松遺跡調査区域図

I区では、2本のトレーニングを設定し掘削した結果、覆土は黒褐色土で出水があり、旧地形が低地に当たることが判明した。

II区は、3本のトレーニングを設定し掘削した結果、東部はI区同様低地であることが、また西部は東・北にかけて傾斜する土地であることが判明した。

このため調査は、III区を地形的に遺跡の範囲の可能性がある土地として捉え、東西・南北方向へ延13本のトレーニングを設定し掘削した。

この結果、III区の西南の一部が台地にあたり、自然層のロームが残ることが判明した。補助トレーニングを設け深く掘り下げたところ、ハードローム面にまで至る掘削が見られ（写真3参照）、旧表土が大幅に削られていることが認められた。

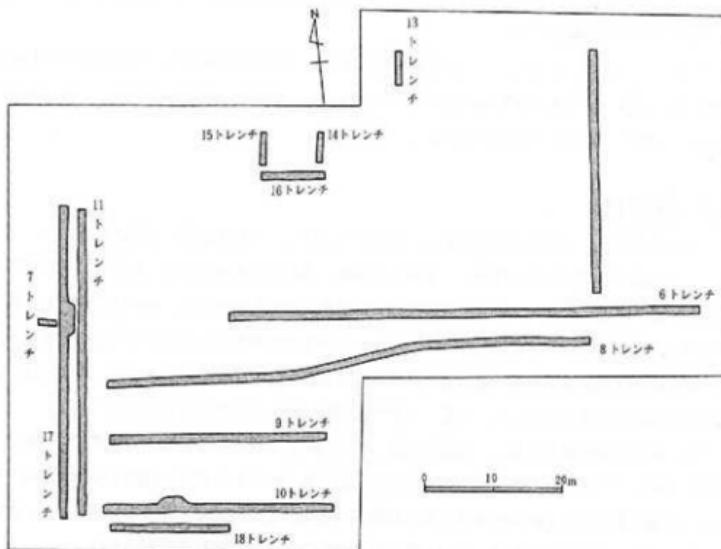
その他、Ⅲ区各トレンチにおいて数本の溝や落ち込みが確認された。

溝は、農地の旧状を示す溝、落ち込みは、性格不明の土坑と判断され、散布する遺物と結びつくような遺構は確認されていない。また各トレンチ中からは、縄文時代、古墳時代、平安時代の土器片が出土しているが、いずれも破片で、出土状態も動いた土地の中からである。

調査の結果、旧地形は、調査地西南から北東に緩やかに傾斜する土地で、昭和30年代の土地改良により変化していることが裏付けられた。開発区域の一部は地形的に台地であるが、遺跡が残る可能性があるのは、南方の国道354号寄りになると思われる。



写真3 二本松遺跡18トレンチ



第12図 二本松遺跡Ⅲ区トレンチ配置図

第4節 館林城跡（加法師郭土壘）

1. 立地と環境

館林城は館林市内のほぼ中央に位置する。地形的には「邑楽・館林台地」上に当たり、城沼に突き出した半島状の台地に本丸、二の丸、三の丸、南郭、八幡郭が設けられた連郭式の平城である。城内の各郭や城下町は、いずれも外周に土壘と堀をめぐらし、東の城沼、北の低地帯、南の城沼へ続く低湿地（現況は鶴生田川）という地形を活かした要害になっていた。

館林城の築城は、古文書によると室町時代中期（15世紀）に遡る。江戸時代中期の書物や明治中期に作成された資料には、中世館林城の城下町は城北にあり、近世初頭に城西に整備したことが書かれているが、室町時代から江戸時代初期の資料は少なく、中世館林城の繩張りを明らかにするには至っていない。

近世館林城は、徳川氏後の廃城期を挟み、前期と後期に分けられる。

絵図面等の資料により、郭の形態や繩張りが確定しているのは後期のもので、秋元藩時代には、牙城部の北側に外郭、稻荷郭、総郭を配していた。総郭は、侍屋敷として位置づけられている。城の西側には、南北約1200m、東西約1000mの城下町を構え、各街道に通じる出入口は5箇所の門が設けられていた。

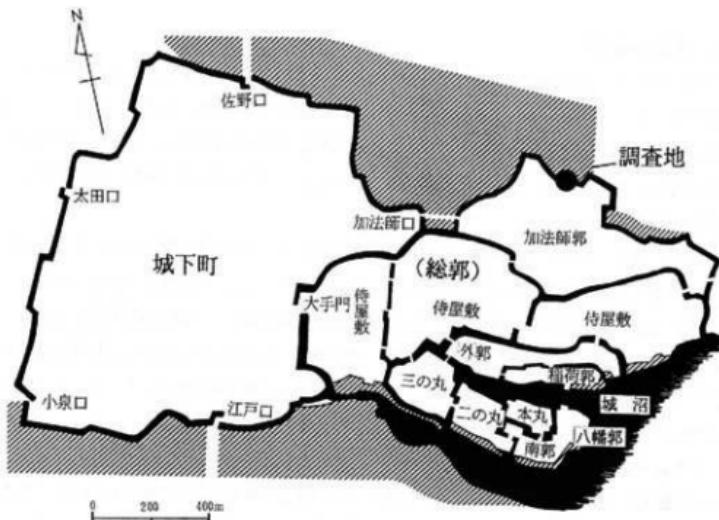
明治7年（1874）の火災により、城の建築物は焼失。城と城下町跡は、概ね現在の市街地に相当し、遺構のはほとんどが失われた。土壘についても、本丸や三の丸にまとまって残る他は、各地に点在して残るような状態である。

2. 加法師郭

城の北に位置する郭で、同地の地名（加法師）を付して「加法師郭」と呼ばれている。

郭の南面を総郭に接し、範囲は、東西約900m、南北約300mである。地形的には「邑楽・館林台地」北端に当たり、北側には渡良瀬川に連なる低地帯が広がり、現在は土地の人工的改変が進み平坦化しているが、昭和22年11月3日に極東米軍が撮影した空中写真を観察すると旧河道や微高地が確認できる。旧河道の上流は、用水路を経て多々良川に連なり、寛文年間の改修事業以前の矢場川とみられ、上野・下野の旧国境に当たると考えられている。

江戸時代の絵図面を見ると、加法師郭は、「中間町」と記されている（館林市立資料館、写真4参照）。しかしながら、絵図面の中にこの郭が描かれているのは、後期のものに限定される。前期のものとして所在が確認された絵図面（西尾市立資料館蔵、写真5参照）には、郭そのものが描かれていないため、形成時期や目的については明らかにされていない。



第13図 館林城の郭の配置と調査地位置図

なお、上記のとおり江戸時代や明治時代に書かれた書物には、中世館林城時代、城北に城下町があり、長尾氏、榎原氏の時代に城西に移し、本格的な整備をした旨の記述がある。この資料に基づき、加法師郭が前期館林城の城下町に該当するとの見方があるが、十分な裏付けを得るに至っていない。

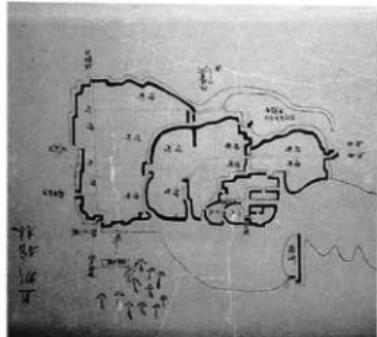


写真4 近世の館林城絵図に見える
「中間町」



写真5 西尾市立資料館所蔵館林城絵図

3. 調査の概要

平成2年8月、加法師町2870-1の土地の地権者森谷サチ子氏より、山林としての維持管理が困難であるという理由から、土地利用を図りたいとの意向が館林市教育委員会に示された。協議は6ヶ年にわたり、最終的に提示された土地利用計画（露天資材置場）によると、土壘を大幅に削平することになるため、開発側の協力による現況の記録保存の後、構造・保状況の確認調査が実施された。

平成7年6月、土壘を覆う樹木の伐採が行われ、長さ約300mに及ぶ開発区域のうち、土壘としての高まりの残る範囲が約100mであることが明らかになり、記録保存の範囲を確定した。

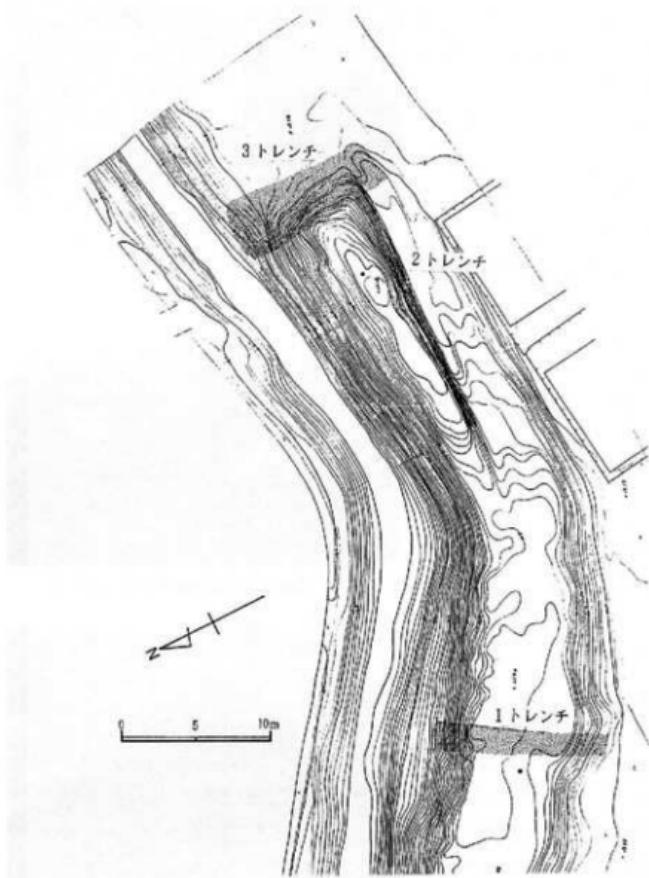
なお、既に平坦化されている部分については、地元の高齢者から「加法師橋の西にも旧城郭の土壘があったが、昭和27年、館林東小学校（現在の第三小学校）新設に際し、校庭が湿地だったので、校庭に土盛するため加法師の人々の勤労奉仕で土壘は崩されてしまった。」という話がある（『さとやの民俗』館林市教育委員会）。

立木伐採後の踏査により、土壘としての高まりが残る部分においても、至るところに採土された状況が見られた。調査は、トレンチによる土壘の構造・保存状況の把握を目的としたもので、トレンチの設定箇所は、目視により最も保存状態が良いと判断した部分（1トレンチ）と東西・南北の方向に断面が露呈している部分（2・3トレンチ）とした。

出土遺物については、三本のトレンチ中から、縄文時代の土器片をはじめ各時代のものが見られ、土壘建設が前時代の遺跡地の土を原材料とする土木工事であることが窺えた。



写真6 館林城跡加法師郭土壘の景観（立木伐採前）



第14図 館林城跡加法師郭土壘 トレンチ配置図
(等高線入現況図は森谷サチ子氏提供)

【1 レンチ】

上部に大きな擾乱があるが、下部に版築が確認できた。造り方は、自然層を整形し、暗褐色系土を載せ、その上を黄褐色系土と暗褐色系土を交互に積み上げている。

その上を、粘土を主成分とする土で覆い包んでいる。なお、主成分が同じ土でも含有物を観察すると、何層かに区分される。

また、自然層の整形は平らでなく、凹状部が三箇所見られ、構築時違う土で埋められている。

南北の幅は、約12mと推定される。高さは上部が採土されているため確定しない。



写真7 館林城跡加法師郭土塁1レンチ



写真8 館林城跡加法師郭土塁2レンチ



写真9 館林城跡加法師郭土塁3レンチ

【2 レンチ】

東西方向の露呈面を掘り下げたもので、表面の風化が著しく、掘削残土の処理の関係で自然層までは掘り下げることができなかった。

確認された面は、土塁上部を覆う粘土を主成分とする層で、東西方向へ長い土塁の中での幅は、広狭さまざまである。

【3 レンチ】

1 レンチ同様、南北方向の横断面であるが、露呈した部分を削ったものであり、表面は籠の根等の影響を受け、確認は困難であった。また、上部内側（南側）は大きな採土を受けている。基本的に造り方は1 レンチ同様であるが、版築に使用されている土は黄褐色系のものが少ない。

北の堀地から南の農地境界の距離は、約9mであり1号に比べ短い。加法師郭を囲む土

星は、公園や絵図面でも広狭の差が大きいため、内側が削られているとの断定は避けたい。

また、1トレンチ同様自然層を削る溝状の凹部が確認されている。この凹部については、平面的に拡張した結果、北東方向へ向かい、堀に落ちていることが確認された。

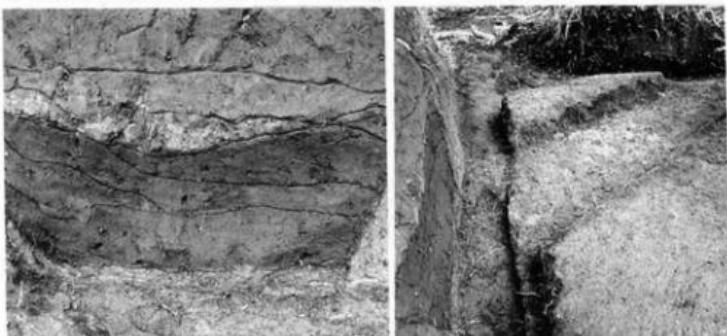


写真10 館林城跡加法師郭土星

3トレンチ

写真11 館林城跡加法師郭土星

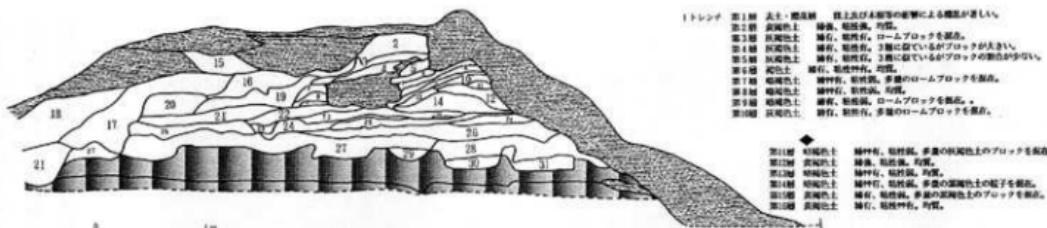
3トレンチ



写真12 館林城跡加法師郭土星の景観（立木伐採後）

【まとめ】

館林城の各郭土星の断面を調査した事例は、今回の調査地の他に平成2年度（城町）と平成6年度（朝日町）の2回ある。少ない事例であるが比較を試みると、城町の土星が最も造り方が緻密であり、朝日町と加法師町のものは粗い。しかしながら、その違いが郭の性格によるものか、材料入手に関わるためのものかは、検討する段階に至っていない。今後の課題としたい。



第15図 館林城跡加法師郭1トレンチ断面図

3.レンチ	第1刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	近畿地方の機械の整備に於ける我が国らしい 特徴、実用的技術、2.レンチの歴史と技術を同じ。
	第2刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。
	第3刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを多く含む。
	第4刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。
	第5刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。
	第6刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。
	第7刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。
	第8刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。 2.レンチの歴史と 技術。
	第9刷	高木・尾澤著 株式会社技術書院	同上。地盤改良工法、鋼筋コンクリートのプロセスを説く。 2.レンチの歴史と 技術。

第2節 太陽・銀河系
路上にいたる銀河の影響による機能が著しい。

第3節 地球の上
植物、微生物、
微生物、微生物。

第4節 気候風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

第5節 地震風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

第6節 地質風土
岩石、微生物、
微生物、微生物。

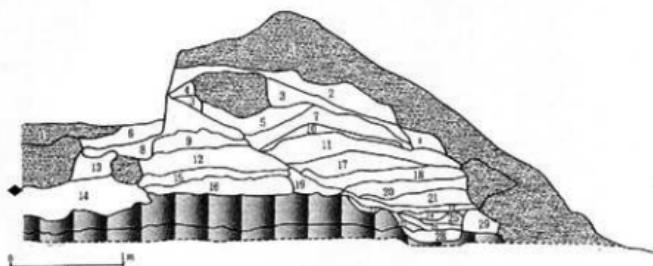
第7節 岩場風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

第8節 喀斯特風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

第9節 火山風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

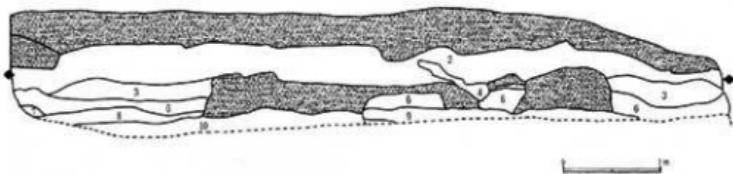
第10節 海岸風土
植物、微生物、
微生物、微生物。

第1回	暗褐色土	暗褐色有、暗褐色無。多量の灰褐色土のブロックを含む。
第2回	灰褐色土	暗褐色有、暗褐色無。灰質。
第3回	暗褐色土	暗褐色有、暗褐色無。灰質。
第4回	暗褐色土	暗褐色有、暗褐色無。多量の灰褐色土の粒子を含む。
第5回	暗褐色土	暗褐色有、暗褐色無。多量の灰褐色土の粒子を含む。
第6回	暗褐色土	暗褐色有、暗褐色無。灰質。
第7回	灰褐色土	暗褐色有、暗褐色無。灰質。



第16図 館林城跡加法師郭3トレンチ断面図

2トレンチ 第1層 道上・堀底層。表土及び砂利の充満による傾斜が多い。
 第2層 岩礁層。砂利層。砂質粘土層。表土。
 第3層 砂質粘土層。砂利層。岩礁層。表土。
 第4層 岩礁層。砂質粘土層。表土。
 第5層 岩礁層。砂質粘土層。表土。
 第6層 岩礁層。砂質粘土層。表土。
 第7層 岩礁層。砂質粘土層。表土。
 第8層 岩礁層。砂質粘土層。表土。
 第9層 岩礁層。砂質粘土層。表土。



第17図 館林城跡加法師郭土壘 2トレンチ断面図

第5節 八方遺跡（I 地点・J 地点）

1. 立地と環境

八方遺跡は、東武鉄道佐野線渡瀬駅の西方約 500mに位置する。所在地は、岡野町字八方及び坂下町字八形であり、最初に遺物散布が認められた範囲の代表地の小字名を付して命名された。

地形的には、「邑楽・館林台地」の北部にあたり、渡良瀬川に連なる沖積低地に突出した舌状台地上を占地している。標高は、22mを越え、東西の低地との差は1.5m以上となっている。

散布する遺物は、古墳時代、平安時代のものである。既往調査は8地点あり、4地点から延べ13軒の住居址が検出され、古墳時代中期から後期にかけての集落の居住域であることが判明している。

周辺の遺跡（「邑楽・館林台地」北端に立地する遺跡）としては、本遺跡の他に岡野・屋敷前・岡遺跡（縄文～平安）、大道北遺跡（縄文～平安）、新倉前遺跡（奈良～平安）、大街道遺跡（縄文・平安、宅地化）、高根・外和田遺跡（縄文・古墳～平安）などが分布している。

2. 調査の概要

八方遺跡は、既往調査が8地点あり、AからHまでの地点名が付けられている。

このため、平成7年度に実施した2地点の調査地は、調査順にI地点、J地点とした。

【I地点】

I地点の発掘調査は、地権者赤坂忠三郎氏の坂下町字八形32-38の土地における共同住宅建設に伴う事前確認調査として実施された。

調査前の現況は、盛土により東側の県道館林・寺岡線とほぼ同じ高さとなっていた。しかし、過去の踏査などから、東から西へ向けて緩やかに傾斜していたことが判明した。このため、調査は、東西方向にトレンチを設定し、地下の状況の把握を試みた。

この結果、同地の地下は、農地として利用されている期間に、ローム層に至る人工的な改変が行われていることが確認された。



第18図 八方遺跡周辺図



第19図 八方遺跡既往調査地点と調査地位置図

【J地点】

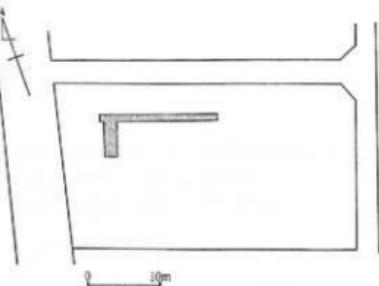
J地点の所在地は、岡野町字八方27-1であり、館林市土地開発公社による住宅団地建設に伴う事前確認調査として実施された。

同地は、民間会社の駐車施設として、昭和50年代以前から宅地化されていた土地で、『館林市の遺跡』では周辺地扱いとなっていた。建物解体時の立会調査により、地下の擾乱が少ない部分があることが確認されたため、事前確認調査が実施されたものである。

調査は、開発区域が9000m²近い大規模なものであるため、敷地全体に18本のトレンチを設定し、遺構の存否を確認した。

この結果、全体的にローム面にまで至る整地が行われていることが確認された。幾つかの落ち込みを調査した結果、2トレンチより一括遺物を伴う土坑2基、3トレンチより石組のある土坑1基、井戸3基が確認された。

これらの遺構については、トレンチ部分のみの調査であり、全容を明らかにするに至っていないため、後日拡張精査する予定である。その他のトレンチでは、井戸以外に遺物等を伴う落ち込みは確認されていない。



第20図 八方遺跡 J地点トレンチ配置図

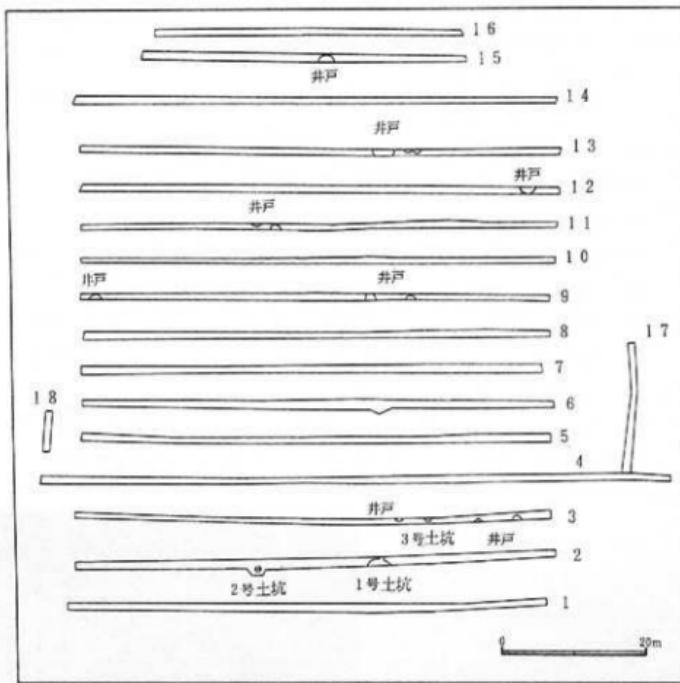


写真13 八方遺跡 J地点1号土坑出土遺物



写真14 八方遺跡 J地点2号土坑出土遺物

N
↓



第21図 八方遺跡 J地点トレンチ配置図

第6節 志柄1遺跡（B地点・C地点）

1. 立地と環境

志柄1遺跡は、東北縦貫自動車道路館林ICの西方約500mに位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査の際、赤生田町字志柄と字中島にかけて遺物分布が認められ、遺跡であることが推定された。名称は、代表地番のある志柄遺跡とし、同じ小字に複数遺跡があるため数字を付して命名された。地形的には、谷田川から「邑楽・館林台地」を浸食する谷地の南側の台地上にあたる。現在この谷は、子ノ神幹線排水路として整備され、埋土により平坦化が進んでいる。現状の付近の標高は、遺跡地…17m台、北側低地…16m台である。

散布する遺物は、平安時代のものであるが、既往調査による住居址の検出事例はない。

周辺の遺跡（谷田川から北西方に延びる開析谷に臨む台地上の遺跡）としては、志柄2遺跡（平安）、子ノ神遺跡（平安）、赤生田中島遺跡（平安）などが分布している。



第22図 志柄1遺跡周辺図

2. 調査の概要

志柄1遺跡は、既往調査がありA地点とされている。このため、平成7年度に実施した2地点の調査地は、調査順にB地点、C地点とした。

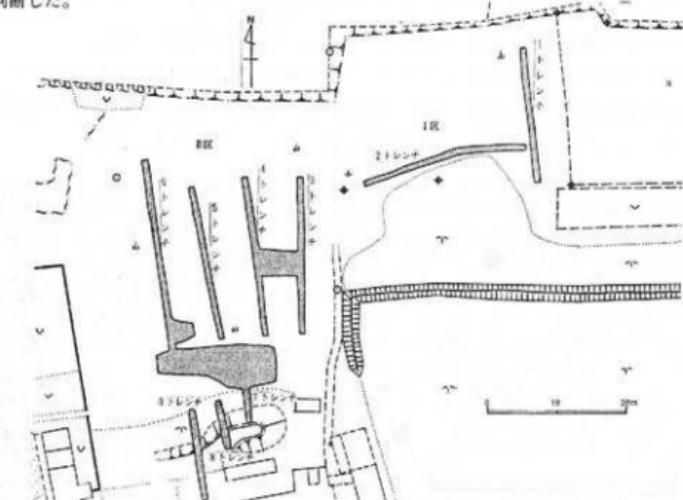
【B地点】

B地点の所在地は、赤生田町字中島1850、1851、1852、乙1814、丙1814であり、館林市土地開発公社による公共施設用地のための整地事業に伴う事前確認調査として実施された。同計画の一部が志柄遺跡として推定された区域がかかり、開発内容が台地の切土を伴うため、協議の結果、事前に確認調査が実施されたものである。調査地は、公園上は道路により分割されるため、

東をI区、西をII区とした。

I区では、南北方向のトレンチ（1）により台地の範囲を確認後、東西方向のトレンチ（2）を設定した。この結果、2トレンチより縄文時代の遺物が数点出土したが、遺構として捉えられるものは確認されなかった。

II区では、南北方向に4本のトレンチ（3～6）を設定した。地下約40cmがローム面であり、数本の溝や落ち込みが見られた。溝については、部分的に拡張した結果、出土遺物ではなく、形態や覆土も古いものでないことが窺え、同地の南にある竹の根が広がることを防ぐためのものと判断した。



第23図 志柄1遺跡B地点トレンチ配置図

また、調査地の南の隣接地の竹林において土盛が見られた。現況は、防空壕跡であるが、古墳や城館の土壘の二次利用の可能性があり、また同地が開発区域に含まれるため、トレンチによりその性格を確認した。

この結果、土盛は、防空壕を覆うコンクリート材と一緒に作られているものと考えられ、トレンチ中からも電線等が出土することから防空壕として造られた土盛と判断した。



写真15 志柄1遺跡B地点

3トレンチ拡張部

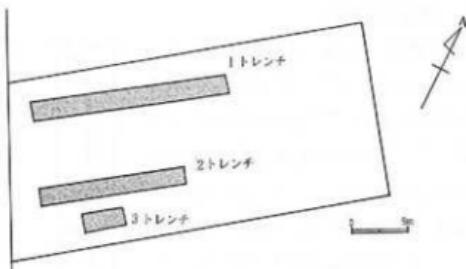
【C地点】

C地点の所在地は、赤生田町字志柄1986-2であり、茂木浩氏の個人専用住宅建設に伴う事前確認調査として実施された。館林市教育委員会は、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて同氏と協議を行い、調査が実施されることになったものである。

調査地は、東方に低地（現況は子ノ神幹線排水路）を控えた土地であるため、調査は東西方向のトレンチを3本設定し進めた。地形的に台地から低地への移行面にあたることが判明したため、台地部分を重点的に調査したが、遺構として捉えられる落ち込みは確認できなかった。

遺物も特筆されるものは

出土していない。



第24図 志柄1遺跡C地点トレンチ配置図

第7節 当郷遺跡

1. 立地と環境

当郷遺跡は、東北緯貫自動車道路館林ICの北方約2000mに位置する。

所在地は、楠町字陣谷及び当郷町字当郷であり代表地の小字名を付して命名された。

地形的には、「邑楽・館林台地」の東部にあたり、城沼北岸の舌状台地上に立地している。遺跡地の北部は、渡良瀬川に連なる低地で、微高地



第25図 当郷遺跡周辺図

(自然堤防)と考えられているが、現況は農地として平坦化が進み、往時の景観は失われている。標高は18m台である。また、現地での聞き取り調査では、採土等が行われているという話がある。散布する遺物は、古墳時代から平安時代のものである。既往の発掘調査の例はない。

周辺の遺跡（城沼北部の台地や微高地の遺跡）としては、本遺跡の他に陣谷遺跡（古墳～平安）、道祖神遺跡（古墳・平安）、四ツ谷袖屋遺跡（古墳・平安）、村前遺跡（古墳・平安）などが分布している。発掘調査より住居址が検出されたものはない。

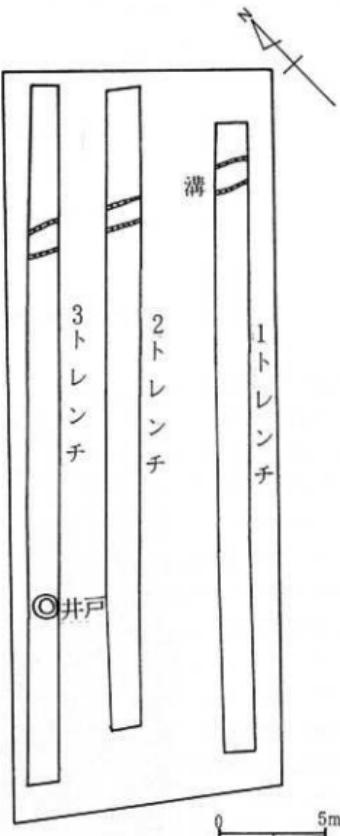
2. 調査の概要

当郷遺跡の発掘調査は、地権者石井堅三郎氏の桶町字陣谷3711-5の土地における個人専用住宅建設に伴う事前確認調査として実施された。館林市教育委員会は、散布する遺物の密度が濃いことや、既往の調査の例がないことなどから、調査が必要と判断し、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて地権者の代理人と協議を行い事前確認調査が実施されることになったものである。

調査地は南北に細長い形であるため、調査は、南北方向へトレーナーを3本設定した。調査地の現況は畑であり、約30cmの耕作土を取り除くと、ローム面が露呈し、聞き取り調査による採土状況が裏付けられた。

調査により、ローム面を削る掘り込みとして確認されたのは、溝1本と井戸1基である。1トレーナーの溝の覆土の中から土師片や中世の土器片（灯明皿）が出土している。

その他トレーナー中縄文土器片や土師器片が出土しているが、磨耗が著しく特筆されるものはない。



第26図 当郷遺跡調査区全体図



写真16 当郷遺跡井戸



写真17 当郷遺跡溝

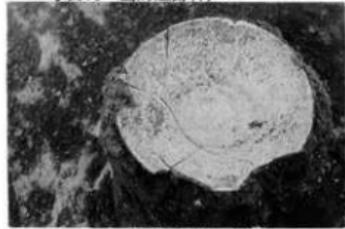


写真18 当郷遺跡溝出土遺物



写真19 当郷遺跡溝出土遺物

参考文献

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第1集～第28集
館林市教育委員会 『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書』 第2集 (1986)
館林市教育委員会 『さとやの民俗』 (1993)
館林市教育委員会 『館林古環境復元図 館林城郭・城下町解説書』 (1984)
館林市教育委員会 『館林城調査報告書』 第1集「城郭図とその変遷」 (1994)
館林市教育委員会 『城下町その歴史－近世館林藩の大名－』 (1988)
館林市 『館林市誌歴誌篇』 (1969) 『館林市誌自然篇』 (1966)
館林市立図書館 『館林双書』 第1巻～第23巻
群馬県教育委員会 『群馬県遺跡台帳東毛編』 (1971)
群馬県教育委員会 『群馬県の中世城館跡』 (1988)
群馬県林務部 『群馬県の貴重な自然 地形・地質編』 (1990)
群馬県 『群馬県史資料編2 原始古代2弥生・土師』 (1986)
板倉町 『板倉町史 通史 上巻』 (1985)
株小川屋 『八方遺跡発掘調査報告書』 (1983)
山崎一 『群馬県古城址の研究』 (1978)
建設省国土地理院 『土地条件図調査報告書(古河地区)』 (1980) その他

抄 錄

ふりがな	たてばやししないいせきはつ(つちようきはうこくしょ)							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	――							
巻次	――							
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編集者名	黒澤文隆							
編集機関	館林市教育委員会							
所在地	群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査 期 間	調査 面積 m ²	調査原因
下堀工道済B地点	市町村 櫛田町字道済	市町村 1207	遺跡番号 105	—	—	1995 1995	85	宅地造成
北近藤第一地点C地点	市町村 苗木町字北近藤	市町村 1207	遺跡番号 53	—	—	1995 1995	138	店舗
二本松	大 谷 町	市町村 1207	遺跡番号 50	—	—	1995 1995	400	住宅団地
館林城	加 法 郡 町	市町村 1207	遺跡番号 33	—	—	1995 1995	87	資材置場
八方I地点	坂下町字八形	市町村 1207	遺跡番号 18	—	—	1995 1995	22	共同住宅
八方J地点	岡野町字八方	市町村 1207	遺跡番号 18	—	—	1996 1996	1060	住宅団地
志柄1B地点	赤生田町字中島	市町村 1207	遺跡番号 127	—	—	1995 1995	380	公共施設用地整地
志柄1C地点	赤生田町字志柄	市町村 1207	遺跡番号 127	—	—	1996 1996	50	個人専用住宅
当郷	柿 町 字 須 谷	市町村 1207	遺跡番号 83	—	—	1996 1996	137	個人専用住宅
遺 跡 名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
下堀工道済B地点	—	—	—	—	確認調査			
北近藤第一地点C地点	—	古墳～中世	土坑3基 井戸1基	中世の灯明皿	確認調査			
二本松	—	—	—	—	確認調査			
館林城	土 墓	中世～近世	土 墓	绳文土器片 土師器片	確認調査			
八方I地点	—	—	—	—	確認調査			
八方J地点	—	古墳～平安	土坑3基 井戸13基	土師器瓶片	確認調査			
志柄1B地点	—	—	—	—	確認調査			
志柄1C地点	—	—	—	—	確認調査			
当郷	古墳～中世	井戸1基 溝1本	—	中世の灯明皿	確認調査			

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 オーラ印刷有限会社

発行年月日 平成8年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
絆の文化と歴史をつなげよう